
帝国繁荣记 <改訂版>

アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国繁栄記<改訂版>

【Nコード】

N4039S

【作者名】

アキ

【あらすじ】

技術力が少し変な異世界に、前世の記憶を持った男の子が生まれた。ネット小説で読んだ内政・軍事チートに憧れていた彼は、自身の夢を実現すべく行動を開始した。

第1話（前書き）

大幅な改修が加えられています。また、濃厚な軍事関係の話は出てきませんので期待している方はご注意ください。

第1話

僕には前世と呼べる記憶がある。

その事に気付いたのは、5歳頃の事だった。

正直に言えば、以前から僕の中で“知らないはずなのに知っているコト”としてあつたモノを受け入れただけ……。

受け入れた今も少し怖いと思うのに、今より昔の3歳とか4歳ぐらいの僕には「知らない物」怖い何か」として、きちんと見ようとしなかった。

でも5歳頃になって、僕は“知らない知識”を受け入れることにした。

上手く言葉を話せない僕に優しくしてくれる兄様と姉様に、この”知識”で何か恩返しをしたいと思つたから……

最初は少し触れただけで、やっぱり怖くなって逃げ出してたけど、受け入れれば受け入れるほどに自分が大人になっていくのを感じて、最後は何の抵抗もなく全部を受け入れられた。

そして、気づいた。

「僕は、二度目の人生を歩んでるの？」

吸収していく知識の中に、僕とは別の人の一生分の記憶があった。一番新しい記憶は、ベットの上で泣き叫ぶ両親に謝罪しながら短い人生を眠るように閉じたもの。

そして、この時に前世の記憶を完全に受け継いだ今世の「僕」は、前世の「俺」へと意識が融合した。

人格の融合ともいえる現象に最初は混乱したが、すでに理解していた「僕」が存在したおかげで、受け入れることが出来た。

そして、人間というのは順応性が比較的高い生き物である。俺自身も例に漏れず“言葉の壁”があるものの新しい家族を受け入れ、「大人ぶった子供」として生活していた。

そんなある日、自国の歴史を昔話として聞いていた時に気づいた。いや。後日、兄様や姉様になんとなく聞いて確信した。

「……ここは、地球じゃない」

てつきり地球で第二の人生を送っているものと思っていたのだが、違っていたようだ。

御伽噺となっているので違いはあるが、大まかな自国の歴史は以下の通りだ。

国名はセオフィラス帝国。

天暦1730年、今から250年程前に初代皇帝セオフィラス一世が建国した歴史的に見れば新参者に分類される絶対主君制国家。

建国当初から帝国主義を唱え、周辺国より一歩抜きん出た軍事力を持っていたために、中小国を武力を背景にした交渉（戦争）で併合し続け、現在では大陸列強の一つとして名を連ねるほどの力をつけた。

現在の皇帝はセオフィラス八世ことマリクヴィセオフィラス。

前世では良いとは言えなかった歴史の知識だが、ここまで躍進した国があれば授業に出るし、忘れることはないはずである。

大英帝国然り、オスマン帝国然り、ローマ帝国然り……

それがないということは「ここは過去か？」とも思ったが、文明が前世の記憶にある21世紀の頃と比べて劣化してはいるものの産業革命のような変革が既に発生しているので、次点として「異世界」が思い浮ぶと共に正解だと思えた。

まあ、「前世の記憶持ち」という怪奇現象を体験しているのだから、異世界があっても不思議じゃない。

そんな無理やりな理由で納得をした俺は、現在の国際情勢と技術力を調べることにした。

せっかく、今の世に不釣り合いな知識を手に入れたのだ。

他人より優位のある“物事”は自慢したいし、ネット小説で読んでいた転生、憑依、逆行モノでの内政・軍事チートに憧れもある。

簡単に言えば「俺、TRUEE！」をしたいのだよ明智君。……
明智君て誰だ？

人を撲殺できる程度の厚さを備えたB5サイズの本を両手で抱きつくように持って、赤い絨毯が敷かれた廊下をトテテツツという効果音が付きそうな走り方で駆け抜ける。

木枠の窓から暖かい日差しが、等間隔で廊下を照らしながら暖めており走っている身としては少々暑い。

「あつ！ 兄、しゃま！」

しかし、それを我慢して走り続けたかきがあり、目的の人物軍服を着た金髪碧眼の美丈夫 を見つけ息も絶え絶えに舌足らずの声を上げる。

俺がこの世界に確固たる意識を持って誕生してから3年が経過し、8歳になった。

だが、未だにセオフィラス帝国の母国語を上手く話すことが出来ないでいる。

日本語が染み付いてしまっているのか、はたまた習得するのが難しいのか？

ただ読み書きは、小難しい本を読むのために猛勉強して、大人顔負けレベルまで習得している。

文法が日本語式で、文字や数字がアルファベットとラビア数字に似ていたために覚えやすかった。

あとは、優秀な家庭教師がいたことが大きな要因かもしれない。

まあ言語能力の成績が悪かったから、優秀だと自負していたのだろう家庭教師は少し落ち込んでいたけど……ごめんよ、出来の悪い生徒で？

「ああ、ニール」

「兄しゃま！」

俺の声に気づいてくれた兄様は、腰を下ろして突撃してくる俺を受け止める体制をとった。

正直に言えば、転ばずに止まれる自信がなかったので、受け止める体制をとってくれたは素直に有難い。

恥ずかしいので、心の中で感謝しながら胸に飛び込むと、大きな体で俺を優しく受け止めてくれる。

が、胸で光輝く勲章が額に直撃して、少し……いや、かなり痛か

った。

幸いにも角ばった形の勲章ではないので、切ったりはしていないと思う。

「つと、この服だとニールを受け止めるのは難しいね」

「……あう」

たぶん赤く腫れているであろう額に、ひんやりとした手を乗せながら、兄様は涙目になっている俺に苦笑を向ける。

その瞬間、脇に控えていたメイドさんが小声で「はう」と声を上げりするが聞かなかったことにする。

にしても、苦笑ですら絵になりますね兄様！

まあ、見慣れてるから特に感情が動かないのだからな。

「こんなに急いで……ああ、そういえば書店に行く約束をしていたんだった」

「はい！」

情報収集として始めた読書だが、前世では活字中毒者であり、この世界に娯楽が少ないという条件が揃って、時間さえ見つけければ読書読書の毎日を俺は過ごしている。

そして気づけば、家にある数千冊の本すべてを読破してしまっていた……3年で。

なので、現在は月に1度の割合で数冊ほど本を買ってもらって

る。

確か先週あたりで、今読んでいる小説の続巻が出ていたはずであり、それを含めて兄様と一緒に買い物に行く約束をしていた。

にしても、幼稚園児ぐらいの子供が歴史書や小難しい本などを読んでいる光景は、シユールであつただろう。

何度か絵本を貰つたりしたが、すぐに読み飽きたから親戚の子供にプレゼントしてしまった。

そつだ。

復習も兼ねて収集した情報を紹介してみようか。

まずは、技術というか軍事方面。

この世界では戦車を主力とした国家と歩兵を主力とした国家が半々で存在しており、列強と呼ばれる大国は一部を除いて戦車を主力とした国家である。

もちろん、帝国も列強の一つであるため戦車を主力としている。

性能云々は詳しく調べられないので分らないが、“とある理由”により帝国軍戦車は機動性と対弾性が重視されている。

その理由というのが、“MT”^{マシントルーパー}というコーギアスの世界にあるKMFと似た人型機動兵器で、帝国陸軍も一つの主力兵器である。

このMTなのだが「戦車のような攻撃力と機動性、歩兵のような

汎用性」をコンセプトに開発されており、機動力は戦車並み、運動性は全兵器を圧倒するというチートなものである。

これのお陰で250年という短い期間で、帝国を“数ある小国の一つ”から“列強の一つ”へと進化させることに成功している。

しかし、チート兵器とは言ったが「問題点が一個もない」というわけではない。

それについては、またの機会に話すというか家にある本だけでは分からないというオチである。

まあ、主力兵器の弱点を公開するわけがないから、当然といえば当然なのかもしれない。

さて、陸がこのような未来的(?)な装備なのに対して、海は大艦巨砲主義よろしく戦艦が主力で大口径の主砲が当然のように装備されている。

どうやら「戦艦の数」＝国力の高さ」となっている節があり、我が国も5隻目の戦艦を絶賛建造中である。

「戦艦を倒すには、同じ戦艦の砲撃か、魚雷を多数撃ち込むしかない」

とは、家を訪問した海軍少佐談。

その少将の名前は、ジェルコ＝イルスイスさん。

母様の兄様で、40歳のカイゼル髭が似合うダンディな叔父様。そんな外見に似合わず大の子供好きで、俺が生まれた時から暇を見つけては訪問し、色々な話や遊び相手をして貰った。

で、戦艦の話をしてもらっていた時。

つい俺が“ある発言”をした時から将来を見込まれ、海軍へ入隊させようと訪れるたびに母様と熱い舌戦を繰り広げている。

おかげで、貴重な情報収集時間が減ってしまった。

因みに舌戦は7戦中0勝7敗と負け続きである。

外交官である母強し！！

話を戻して、次は空だが海の話である程度予想している人もいるだろう。

陸海から技術的に大幅な遅れが出ている。

エンジンの信頼性が低いために飛行機は存在せず、飛行艇がチラホラと偵察として戦場で見かける程度。

軍事用の飛行船は存在するにはするが、大半の国は積載量の高さから輸送用のみに使い、積極的に前線の戦場へは出さない。

あつ、輸送で思い出した。

帝国は常時戦争状態ということもあり、補給について意欲を燃やしている。

軍用トラックや飛行（輸送）船、鉄道の配備・整備はもちろん、

三軍（陸海空）の規格統合を図るなどの円滑化を図っている。

まあ表は仲良しだが、裏ではどうなっていることやら……

さて常時戦争中という言葉を出したので、次は国際情勢だ。

まずは世界地図だが、前の世界で存在したと考えられる超大陸「パンゲア大陸」、そのままである。

何？ 形が思い浮かばない？ ネットで調べなさい。

周囲に小島が転々と存在しているだけで、あとはすべて海、海、海！

すでに、世界一周を成し遂げている人がいるので他大陸は存在していないだろう。

南極大陸とか北極大陸とかがあれば別だが……

そんな世界唯一の大陸にある我が国は、ちょうど南極大陸があったとされるあたりに存在している。

領土を割合で表すと、平地5割、山岳3割、湖や池1割、砂漠1割。

で、さすが帝国主義を唱えているだけあり、周辺の国と一様に仲が悪いというか、戦火を交えていないだけの戦争状態である。

兄様の話を盗み聞きしたりしていると、工作員やらが入国しまくっているそうだ。

けど、それと同じ数だけ排除されているらしい。

険悪国の中でも、北にあるパンゲアというアフリカ大陸があつたとされる位置に存在する列強の一つ、トレストアン王国とは常に銃口を突き付け合う仲である。

何度も小規模な戦争を起こしては結局決着がつかず、休戦の繰り返しをしていて、現在も睨み合いが続いている。

周辺の中小国も、軍事力は“ゾウとアリ”の差がありながらも対帝国連合を作り抵抗。

さらに、王国とは「レゾン協定」なる相互防衛協定を結んでいる。

ただ帝国は国境の4割を山脈と海に、1割が永久中立国という名の属国であるために、容易に四方八方から攻められる心配はない。

とはいえ、下手をすれば連合&王国VS帝国という構図になる可能性があり、補給や軍事力の関係で迂闊に攻めることが出来ず国境沿いで睨み合いが続いている。

いくら強い兵器が保有しても、数の暴力には勝てないといったところだ。

っと、あまりトリップしていると心配をかけるから帰還しよう。

てな感じで現実に戻った瞬間、タイミングを計ったかのように兄

様の言葉が聞こえた。

「ニール。約束を破るようで申し訳ないんだが、この後はル家の人と会わなくちゃならないんだ」

「また、あらしよ……争い事ですか？」

俺の問いに苦笑だけを返す兄様。

言葉にしていけないが肯定の意味だと分かる俺は、「分かりました」と身を引く。

国を賭けた戦争についての会議と、弟との些細な約束では重要度は天地の差があることは分かっている。

年相応であれば癩癩を起こしそうだが、内面が年不相応なので我儂が許される限度を弁えている。

だから見送りの言葉をかけようとした俺に、兄様はひとつの提案をする。

「もしだったら、ニールも久しぶりにル家に行ってみるかい？」

「はい！」

即答ですが、何か？

ぬふふふつ、他家に行けば家にはない本が置いてある事だろう。

まあ、長居はできないから軽く流し読みが限界だろうが読まないよりはマシだ。

「確か今年で3歳になるエレン嬢は、ニールがお気に入りみたいだから喜ばれるよ」

「……」

まさか兄様。俺に子守をさせる気ですか？

その眩しいまでの笑顔は、俺に子守をさせる気ですね！

のあああつ、せつかくの読書時間が削られる！

「では、家で留守番してるかい？」

「兄しゃ……兄様、早く行きましよう！ 夜になるです！」

「その前にニールは着替えておいで、その格好では外には出せないよ」

「はい！」

兄様の言葉に返事をすると、自分の部屋に向けて走り始める。そんな俺の後ろにはロングスカートを軽く揺らしながら一人のメイドさんが、影のように付き従っていく。

ん？　なんで、メイドを引き連れてるのかだって？

そつえば自己紹介をしていなかった。

えーっ、コホン。

お初にお目にかかる。

私の名は、ニールゥラゥセオフィラス。

セオフィラス帝国、第5皇子・第7皇位継承者です。以後お見知りおきを。

第2話

「お久しぶりです。ニール兄様」

「久しぶり、エレン」

ル家に到着した俺と兄様を迎えてくれた使用人と共に、金髪碧眼の美少女が出迎えてくれた。

彼女の名は、エレン＝ル＝セオフィラス。

今年で6歳になる。セオフィラス帝国、第3皇女・第9皇位継承者でル家の一人娘。

「フレイ様に似て美しくなったね。エレン」

「ありがとうございます。ルベルトお兄様」

兄様のキザっぽい台詞に対して、微笑をつけて難なく対応する。俺より年下とは思えない対応に、ちょっと将来が未恐ろしく感じてしまう異母兄妹でもあるね、これは……。

ん？ 兄様の名前を初めて知った？

ああ、そういえば紹介をしてなかった。

ルベルト＝ラ＝セオフィラス、20歳。

セオフィラス帝国、第3皇子・第4皇位継承者にして帝国陸軍中佐。

容姿端麗であり、堅物が多い軍の中で柔軟な思考を持ち、部下（8割は女性）の人気も高いという完璧人間。

前世で、そんな人間が近くにいれば「リア充、爆発しろ！」と言
いそうだが、俺も兄様の容姿を引き継いでいるからなあ……。

とはいえ、あの王子様オーラは真似できないし、対話能力の不足
が大きなマイナスとなっている。

まあ、兄様と繋ぎを持つと近づいてくる人間は、俺を褒めちぎ
っているけどね！

だが甘いな、体は子供でも精神はお前らと同じだからお世辞には
惑わされんわ！ふはははっ！

ちょっと変に所へ思考を飛ばす俺を無視して、兄様とエレンが話
を続ける。

「今日は、お母様と？」

「ああ。フレイ様は今どちらに？」

「おそらく書斎にいるかと」

「分かった。後は大丈夫だから、ニールをお願いしてもいいかい？」

「え？ ですが……」

躊躇いの返事を返しつつも、目を輝かせるエレン。

うん。年相応の反応に、お兄ちゃんはちょっと……いや、かなり
安心するよ。

「エレン。中庭の案内、頼んでいい？」
「はい！」

俺の言葉に、笑顔で答えてくれる。

エレンが中庭で花を育てていると聞いていたから、話を振ってみただけで間違っていなかったな。

俺は「早く行きましょう」と手を引く彼女に笑みを返し、兄様に「行って来ます」と伝えてから引かれるがままに歩き出す。

そして、俺達付のメイドさんだけになった時に彼女は口を開く。

「ちょうど私が育ててる花が開いたの、ニーにいに見せてあげるね！」
「楽しみだ」

外面を気にしないで済み、本来の話し方で俺に自慢げに話しかけてくる彼女。

信頼するものにしか見せない素の表情を見せてくれる彼女に、俺は嬉しい気持ちになりながら花畑へと向かっていった。

時が進み。

ベットの上で遊びつかれたエレンに膝枕をしながら、借りた本のページを捲っていく。

普段であれば構って欲しいと彼女に邪魔されるが、今は安らかな寝息を立てている。

まあ、こうなることを予測して遊び続けていたのだけだね。

さすがに、俺も疲れたけど……むにゃむにゃ……

って、危なっ！

ここで寝ては、せっかく借りてきた本を読む時間がなくなってしまう。

頬を叩く事で眠気を飛ばすと、本の文字を追う作業に戻る。

今読んでいるのは建築に関係した本なのだが、建築学を学んでいなくても一つ気づいたことがある。

「重機が存在してない」

まったく存在していないというわけではないが、前世の重機を知っている者としては陳腐なものばかりだ。

帝国では、MTが宇宙世紀のように作業ロボとして運用されているので他国よりはマシだ。

とはいえ、軍事用の兵器を民間に回すわけにはいかないので国営の会社のみで、数は恐ろしく少ない。

さらに、操縦が出来る人間は軍が引き抜いていくから、スペック通りの性能を発揮できないという有様。

「これは、チートのチャンスか？」

重機の設計図はかけないが、使用目的と大まかな構造は記憶の中にある。

兄様に説明して作ってもらおう。

前世で、すでに有効性が証明されているのだ。

工業化の真っ只中の現在、重機があれば他国より一足も二足も先にいける！

「くっくっくっ、こつも早くチートが出来るとは」

夢の実現への道筋がハッキリと見え、思わず笑みが漏れてしまう。

自身の膝で悪夢に魘されているかのような反応をするエレンに、
気づかないまま……

ル家への訪問から数日後

「建築機械、ね」

「はい」

兄様に重機の図案を提出すると共に、台本を使用した説明を行った。

最初は子供考えだからと微笑みを浮かべていたが、俺の説明を聞いていく内に真剣な表情へと変わっていった。

「確かに、これがあれば建築速度が飛躍的に上げる」

「試す、価値、ありますか？」

「うん。いくつか修正が必要などところがあるけど、これは試してみる価値はあるよ」

兄様の言葉に、両手でガッツポーズを取る。

チートへと第一歩だ！

第3話

兄様へ「重機開発計画」を提出・一部修正後に再提出を行ってから、数日が経過した。

俺の計画案を元に、兄様はラ家が抱え込んでいる複合企業体「W E P C」に開発・生産を指示した。

とはいえ、多数の重機をいきなり開発するのではなく、パワーシヨベル、ブルトーザ、ダンプトラック、クローラークレーンといった使用頻度が高そうな4機種だけだ。

それに、有効性に疑問視をしている人もいるので実物を見て納得してもらわないとならない。

まあ、前世で成功しているから別に心配をしないけどね。

あえて言えば、技術力の問題から油圧系部分がワイヤー系に変更しているので、その部分だけ心配と言えば心配かもしれない。

それ以外は乱暴な言い方だが、戦車の部品を流用すればいい。

重い車体を動かすエンジンとキャタピラは、他国へ流れるのを警戒してランクを落としても活用できるだろうしね。

そんなこんなで、約1ヶ月後に各種1号機が完成したとの報告が届いた。

さっそく、提案者だから特別に視察に同行することを許してもらい、兄様と共に現場へ向かう。

さあて、見せてもらおうか帝国産の重機を！

「……………」
「ふむ、これは凄いな」

試験所に並べられた4機種为重機。

開発者達は完成させたゆえの達成感で誇らしげな顔をしており、初めて現物を見る企業の重役+兄様は重機の存在感に驚きの声を上げる。

そして、俺は……

(シヨボツ!?)

別に意味で驚いていた。

車高が、大人の身長ほどしかないパワーシヨベル。

軽トラと見間違えてしまいそうな、ダンプロトラック。

それ以外も俺が知る重厚感溢れる重機の姿はなくて、個人所有レベルの小型重機が並べられているだけである。

確かに完璧な図案を提示できなかったし、初めての試みで前世と同じものは出来ないと思っていたが……

俺の予想を下回る出来に、ガクリと首が垂れた。

『では、各建築機械の試験を開始します』

そんな俺に姿に気づく者はいないまま、運用試験は開始された。馬力が低そうなエンジン音を響かせ、動き出す重機（私的にはモドキ）。

が、人力と比べれば格段に上がった作業速度、重い物を軽々と持ち上げるパワー、燃料が続く限り動き続けることができる持久力。今までの作業を馬鹿にしていると思わせるほどの能力に、企業の人間は目を輝かせる。

当然ながら俺を除く全ての人間が結果に満足し、その場で増産・発展期の開発指示が出された。

当分は運用やスタッフの熟成に時間を取られるが、そう遠くない内に帝国内で重機が音が響き渡ることになるだろう。

しかし、まさかチートの実現がここまで難しいものだったとは思っても見なかった。

それに今回は兄様の同意が得られたからいいものの、今後也确实に得られるとは限らない。

そうになると、自身で行動を起こさないとならないのだが、実績やら名声といった色々な物が全くといっていいほどない。

今回の件でW E P Cの重役や開発者、兄様には良い印象を与えただろうけど……

当分は情報収集だけをしていようかと思っていたが、簡単に実現可能でありながらまだ世に出たいモノを開発し、実績などを稼いだほうがいいのかもしれない。

それに、前世の記憶が薄れていくことを想定して知っていいことを

書き残して置こう。

もちろん、日本語やネット用語などを使用して防諜対策を採ることも忘れない。

と、頭の中で今後の計画を建てつつ……

「ニール様の開発計画、私は信じておりましたぞ」

「ありがとうございます」

「さすが、ルベルト様の弟君ですな」

「いえ。まだまだ、兄様の足元にも、及びませんよ」

俺を取り囲むWEP Cの重役達への対応をこなしていく。

俺の不評は、そのまま家の不評へと繋がるから緊張はしているが、すでに対応方法は（兄様直伝）伝授されている。

捻りのない対応になっているだろうが、それはこれから身に着けていけばいいだろう。

というか、今後も色々世話になるだろう重役達の、顔と名前を早く覚えなとな。

後で、兄様に顔写真つきの一覧表でも貰って置こう。

数日後、俺は机の上におかれた数枚の紙と睨めっこをしていた。そして、後ろから指揮棒のような細い棒がある一箇所を指し示すと、兄様の声が俺の鼓膜と脳を刺激する。

「この人が、今回の開発責任者であるツベル」エキルス氏でベルク
「エキルス陸軍少将の甥にあたる人だ。計画に真っ先に賛同した人でもある」

「……………」
「で、この人は……………ニール、少し休憩しようか」
「……………は、いい」

兄様の苦笑が含まれた言葉を受けて、煙を上げていそうな頭をテーブルへと横たえる。

テーブルの冷たさが熱を持った脳を適度に冷やしてくれる心地よさに、「あう〜」と変な声が出てしまう。

先日考えていたとおりに、WEP Cの重役を覚えようと兄様に提案した。

すると「その人の背景も知っておくと得だよ」という言葉を受け、兄様を教師とした暗記授業が開始された。

重役は十数名のみ、それも特徴的な人も多く全盛のアニメキャラやゲーキャラに見立てたりしたので、背景を合わせても覚えることは1日2日で終わった。

だが、俺の覚えの良さに感動した兄様が「この際、今回の開発計画に参加した人も覚えておこう」と言い出した。

俺自身としても、今後のことを考えると覚えておいて損はないな
と思ったので、教えてもらおうことにした。

だが、これが間違いだった……。

「……兄様。100人は、多すぎ、ませんか？」

「これでも、計画に参加した全体の1割未満なんだけどね？」

「……おう」

「新しいことを始めると言うのは、それだけ大変なことなんだ。覚
えておくといいよ」

「はい」

オーバーフローした脳みそを冷やししながら、まだ半分しか終わ
っていない名前の書かれた一覧表を見ながら小さな溜息をついた。

これも、将来「俺TUEEE」を実現するためだと納得する事に
しよう。

忙しいのに俺のために教鞭を振るってくれる兄様へ、応えなくて
はならないしね。

帝国領内

街の大通りを一本外れたところにある花街。

売春防止法は、まだと言うべきが存在していないので三大欲求の一つである性欲を満たす店が数多く建ち並んでいる。

さらに、この世界は成人年齢が14歳となっているために、ニールが見れば「まだ子供じゃん！」と言いたくなる年齢の子供が男帝国兵を相手にした商売をしていた。

そして、そんな彼女等の大半は帝国領土へと組み込まれた国の民たちである。

「おい、そつちに逃げたぞ！」

「待ちやがれ!!!」

突如として男の怒声が、数人の男がバタバタと走る音と併せて響き渡る。

彼らの視線の先には、粗末な布を一枚身体へ巻いただけの黒髪の少女が、死に物狂いで男達から逃げている。

“少女が、男たちに追いかけている”

普通であれば、警察沙汰になる出来事である。
しかし、現在の場所と少女の身なりで周りの人間には“日常”として受け入れて見て見ぬフリをする。

少数の同情や、侮蔑の視線が混じっているが大方は無関心。

理由はただ一つ。

逃げている少女は帝国民ではなく、組み込んだ国の人間だからである。

酔狂でない限り、見知らぬ男へ喜んで股を開く女はいない。

だから逃げる。

しかし、目に映るすべてが自分に味方してくれない状況で逃げ切れずはない。

捕まり「再教育」という名の暴行・暴力を受ける。

今逃げている少女も、同じ運命を辿るだろう。

それが街にいる全ての人間の思いである。

事実、年齢や今までの待遇により体力がない状態での全力疾走は長く続かず、小回りで稼いだ距離がグングンと詰められていく。

だが、少女に取つての奇跡が起きた。

偶然としかいえないタイミングで、脇にある線路の上を貨物列車が通過したのだ。

先にあるカーブへ備えて減速した状態で……

失敗する可能性を考える間もなく、少女は力を全て使って飛び移った。

そして、奇跡は二度起きる。

「なっ!?!」

「あのガキ、飛び移りやがった!」

運よく飛び移れたとしても貨物列車の勢いに弾かれるはずの少女が、空だからと扉が開かれた貨物車両に、転がり込むような形で乗り込むことに成功した。

あまりにも上手く飛び乗れたことに、追っ手の男たちは呆然としてしまう。

そして、これ以上の追跡を諦めざる得ないことを実感した。

たかが少女一人のために、国営鉄道のダイヤを狂わせるわけにもいかない。

彼らは、自身の上司へなんと報告すればいいのか途方にくれることになった。

一方、逃げ出すことに成功した少女。

今後の事を考えもせずに行動したため先行きが真っ暗な現実に、こちらも途方にくれていた。

ただ貨物列車が向かう先には、チート実現に奮闘している一人の

男が在住の街である。

これを奇跡と呼ぶかどうかは、誰にも分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4039s/>

帝国繁栄記 <改訂版>

2011年5月1日18時05分発行